

ホゾ穴と正面向き 検証・首里城大龍柱 復元

□上□

安里 進



あさと・すすむ 1947年那覇市生まれ。専門は考古学、琉球史、漆工史。琉球大学卒。大阪府教育委員会や浦添市教育委員会で文化財の調査・整備、文化行政に携わる。沖縄県芸術大学教授や県立博物館・美術館長などを歴任。現在、県立芸術大学名誉教授。

平成の首里城復元を検証した私の「報告会資料」に、大龍柱の正面向き復元を主張する永津慎三琉球大学名誉教授から「データ改ざん」「捏造」「不正行」という言葉による反論があった(3月15日、同16日付本紙文化面)。私が、戦前の大龍柱には石

階段の欄干に連結するホゾ穴は確認できないと論じたことに対する反論だ。ホゾ穴の有無は、正面向き復元が妥当かどうかを検証できる重要な論点である。ここでは、新たに入手した古写真の分析をもとに、ホゾ穴の有無その意味について改めて説明す

学術的議論を 私の「報告会資料」とは

西村氏の「報告会資料」で提示した大龍柱のトグロ巻展開図に、大龍柱の背面にホゾ穴が存在しないことが国民の納得でき、復元につながるものとして

古写真に龍柱の背面 ホゾ穴なしを示す「展開図」

上下にスレ

1月30日の「首里城復元に
向けた技術検討委員会 報告会」で提出した「平成復元
の検証」である(改訂版を
首里城公園ホームページ
で見ることが出来る)。そ
のなかで、いわゆる「寸法
記」の大龍柱図による向き
合い復元は妥当と論じた。

冷静な学術的議論を呼びか
けた。

大龍柱の正面復元を訴え
てきた西村貞雄氏は、末広
階段の欄干に正面向きの大
龍柱が連結するのが本来の
姿で、大龍柱を台石の上に
立てた形で復元するべきで
はないという。西村氏の正
面向き復元が妥当かどうか
はホゾ穴の有無で検証でき
る。戦前大龍柱のトグロ巻

巻部の背面が古写真に写っ
ていたのである。これは、
このスレについて西村氏

は、1993年論文「首里
城正殿・大龍柱の「向き」
についての考察」で次のよ
うに指摘している。昭和修
理以後の阿形大龍柱(南側
の開口龍柱)の背面(後面)
写真(図1⑤)について、
「下部の巻き付け部分が1
/4回転(90度—安里注)
ずらした状態で据え付けら
れ、坂本万七の阿形の後面
写真の下部巻き付け部分
は、本来は右側側面にあた
ると述べている。これを
御庭側からみると上部左側
面に下部背面が取り付く。
西村氏の指摘を図解する
と図2のようになる。昭和
修理以前の阿形大龍柱は上
部・下部とも正面が御庭側
に向くが、修理以後は上部
背面に下部右側面が取り付
き、上部左側面には下部背
面が取り付く。実際の古写
真(図1④⑤)もそのとお
りだ。

この対する永津氏の反
論は、相手の人格を貶める
ことで自説の正当性を印象
づけようとするもので、学
術的議論にはほゞ遠い。こ
のような手段に訴えてでも
永津氏が否定しようとした
部分は、「報告会資料」の
「Ⅲ—5、戦前大龍柱は欄
干に連結していたのか—」

部
の背面にホゾ穴がなけれ
ば台石の上に立っていたこ
とになるが、ホゾ穴があれ
ば大龍柱は欄干に連結して
いた証拠になる。しかし、
これまで背面の写真は1枚
もなくホゾ穴の有無は不明
とされてきた。

昭和修理についての西村氏
の指摘から導き出したもの
だ。

では、昭和修理について
の西村氏の指摘とはどのよ
うなものか。昭和修理以前
の大龍柱は、胴体中央部を
除去して上部と下部(トグ
ロ巻部)を接合し、銅製力
スガイで固定していた図
1①②③。昭和修理では、
大龍柱を正面向きから向き
合いに変えている(図1④
⑤)。上部と下部を固定し
ていた力スガイを取り外し
て、上部を90度回転して横
向きにしたが、下部は18
0度回転したために上部と
下部にスレが生ずること
になった。



図1：昭和修理以前と以後の阿形大龍柱
①～③沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵(鎌倉芳太郎撮影)。④東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵。⑤『沖縄 昭和10年代』より(撮影：坂本万七)

昭和修理以前(正面向き) → 昭和修理の回転(横向き=向き合い)



図2：昭和修理の
上部と下部の回転

昭和修理以後は上部
背面に下部右側面が取り付
き、上部左側面には下部背
面が取り付く。実際の古写
真(図1④⑤)もそのとお
りだ。

そして、片形(北側の閉
口龍柱)の場合は、阿形と
は逆方向に回転しているの
で上部右側面に下部背面が
取り付く。
(⑥は2日掲載)